

# 再発見・牛久第二十五話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

## 牛久と由良家⑥

### 由良家と東端穴村 — 狸穴村を東端(端)穴村に —

由良領に狸穴村が二方所(筑波・河内両郡に)

— 当地が東方に位置して

いるので東端(端)穴村に —

天正18年(1590年)盛夏、豊臣秀吉より由良国繁が、牛久城を居城として、牛久村など12カ村5435石を宛行われた。

12カ村の中には、筑波郡狸穴村(現つくばみらい市)と河内郡狸穴村(現牛久市東端穴町)があり、行政を掌る上で支障があった。

由良家由来ノ書によれば、国繁は翌年の天正19年に筑波郡の狸穴村より、当地が東方に位置しているところから、東をつけ、狸を端(端)に改め、河内郡東端穴村とした。

狸は『むじな(たぬきの仲間)』を指し、端(端)は『あなぐま(いたち科たぬきに似ていて、地方によっては『むじな』と呼んでいる)』の異称であ

るが、たぬきと混同して使われることもある。端にちなんで、かつて東端穴村の集落東側、池田家前の畑に塚があって、『猫塚』と呼ばれていた。

東京の『狸穴』という地名

— 港区立港郷土資料館  
提供の資料より抜粋 —

東京都港区麻布狸穴町に、かつてソ連大使館があったことから、『狸穴』はソ連大使館を指す隠語として用いられていた。

この『狸穴』の地名の由来を港区立港郷土資料館提供の資料の中から抜粋してみた。

狸穴坂『まみとは雌(めす)サビまたはアナグマの類で、昔その穴(まぶ)が坂下にあつたという。』  
狸穴『雌狸穴とも魔魅(まみ)穴とも書く。』

国繁の孫貞長が

八幡神社を東端穴村に遷祀

— 清和源氏・由良家の氏神(弓矢の神) —

国繁の子貞繁は、徳川家康に近侍

將軍直属の旗本に列して、江戸にその屋敷を割り当てられたので、牛久城は廃城(一國一城の制度が定められる以前に)となっていた。

貞繁の子貞長は元和9年(1623年)に、牛久城跡に鎮座している由良家氏神(弓矢の神)の八幡神社を東端穴村の村落(字(小字)地名が本田)になつている地域で、元禄14年までに現在の高台に移つた)の東側隣接地に遷祀した。

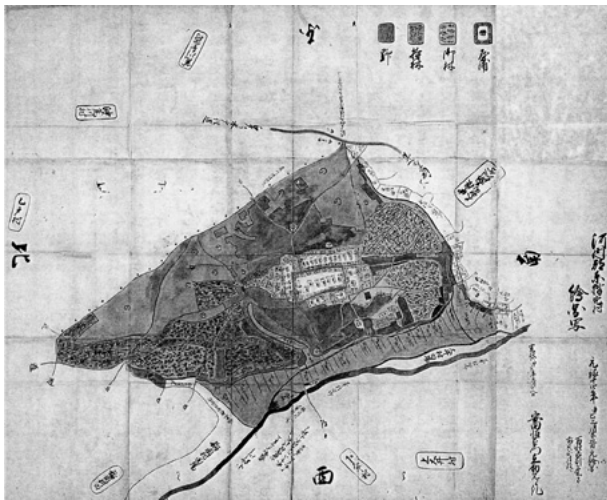
この八幡神社の来歴を簡単に記述しておく。次のようだ。

清和源氏(第56代清和天皇賜姓の皇子の子孫)の八幡太郎・源義家(※)の孫にあたる義重が上野国の新田庄

(現在の群馬県太田市)の下司職として土着し、苗字を新田と名のつた。義重は、同地に山城国綴喜郡男山(現京都府八幡市)の石清水八幡宮より八幡神を分霊して八幡神社を造宮し、新田家の氏神(弓矢の神)とした。

義重の7代後の義貞は、鎌倉を攻めて鎌倉幕府を倒した。義貞の9代後の由良国繁が、秀吉より牛久などの領主に任ぜられ牛久城に移つた際、同城内に八幡神社を移築・遷祀したのだった。

※清和源氏源頼義が、長子義家を石清水八幡宮で元服させたことから、八幡太郎と呼ばれた。



江戸幕府の徳川將軍が第5代綱吉の時の元禄14年(1701年)作成の一東端穴村絵図(池田家所蔵) — 東端穴誌・里の風土記より。江戸時代、村名主・庄屋(地方によって里正・肝煎といった)の家には必ず村絵図が備えてあった。

東端穴村の村落は、もともと八幡神社の北側隣接地から細長く形成されていたが、元禄14年(1701年)までに現在の高台に移されている。